令和七年度夏季

全国大学国語国文学会 第一三一回大会案内・要旨集

期日　六月二八日（土）・二九日（日）・三〇日（月）

会場　二松学舎大学　九段キャンパス　（対面とZoomによるハイブリッド大会）

一日目（六月二八日）

〒一〇二-八三三六　東京都千代田区三番町六-一六　九段一号館中洲記念講堂

二日目（六月二九日）

〒一〇二-〇〇七四　東京都千代田区九段南二-二-四　九段三号館

【交通アクセス】

東京メトロ東西線・半蔵門線、都営新宿線「九段下」駅二番出口から徒歩八分

令和七年度夏季

全国大学国語国文学会　**第一三一回大会（対面とオンライン〈Zoom〉によるハイブリッド大会）ご案内**

○参加を希望される方は、本学会ホームページ（https://zenkoku-sjll.org/）の「次回大会案内」のページにある参加申込フォームより、六月二一日（土）必着でお申し込みください。

○申し込まれた方には、申込締切後にメールにて参加情報をお伝えします。

○感染症の拡大状況等によっては、全面オンラインに変更となる場合があります。

○出張依頼状のご依頼は、学会事務局・大会担当までご連絡ください。

（学会事務局）〒七〇〇―八五一六　岡山県岡山市北区伊福町二―一六―九

ノートルダム清心女子大学文学部　東城敏毅研究室内　全国大学国語国文学会事務局・大会担当

学会事務局メールアドレス　office@zenkoku-sjll.org

大会用メールアドレス　conf@zenkoku-sjll.org

○大会についてのお問い合わせは、下記アドレスまでご連絡ください。

第一日　6月28日（土）

代表委員会（10時30分～12時）　**会場　九段一号館　四〇一教室**

委　員　会（12時10分～13時）　**会場　九段一号館　四〇一教室**

会場　二松学舎大学九段キャンパス　一号館中洲記念講堂

受付　13時～（Zoom開場　13時15分～）

開会　13時30分～

学会代表挨拶　大東文化大学教授　藏中しのぶ

会場校挨拶　二松学舎大学文学部長　五月女肇志

大会テーマ

日本文学史の再構築 ――ヨーロッパの視座から――

近年、人文科学のさまざまな分野で、国際化が推進されている。本学会においても、「国際日本学の動向」（『文学・語学』第二二四号）における諸外国の研究動向の紹介をはじめ、国際特別企画（二〇二二年度冬季大会・二〇二三年度夏季大会・二〇二三年度冬季大会）を通して、日本の文学語学研究の国際化を進めてきた。

こうした実績を踏まえ、本シンポジウムは、フランス日本学会・イタリア日本学会の協力を得て、両学会を代表する講演者を迎え、ヨーロッパの日本学の視座から日本文学史と日本の文学語学研究のありようを問いなおし、日本の文学語学研究の国際化に向けて新たな視座を切り拓いていくことを目的とする。

時代とジャンルを越えて、さまざまな分野の研究者が集う本学会の特性を生かして、会員諸氏とともにヨーロッパ諸国における日本学の教育研究状況や問題意識を共有し、ヨーロッパの日本学と日本国内の文学語学研究とをつなぎ、旧来の枠組みを越えた新たな議論の生まれる場としたい。

シンポジウム（13時45分～17時）

コーディネーター・共同討議司会　大東文化大学教授　藏中しのぶ
総合司会　二松学舎大学専任講師　長谷川豊輝

趣旨説明

コーディネーター　大東文化大学教授　藏中しのぶ

「繁昌記」再考：近代日本における都市表象の系譜 ――永井荷風を一例として

ナポリ東洋大学准教授　ガラ・マリア・フォッラコ

（司会）成蹊大学教授　大橋　崇行

明治時代は、近代国家の形成と西洋文化の導入を背景に、文学の観点から、新たな価値観と表現形式を追求する動きが強まった時期である。この過程で、従来のいくつかの文芸は次第に文学的な価値を失い、日本文学の正典化が進められた。そうした中で、

特定の作品やジャンルがキャノンから排除されることもあり、「繁昌記」はその一例である。「繁昌記」は都市の繁栄や庶民の生活を描いた作品群であるが、明治文学の新しい理念とは相容れないものとされ、文学的評価を受けることは少なかった。

「繁昌記」は江戸から東京への都市の移行期に、商業や文化の中心地としての都市の姿を活写している。形式の古さや風刺的な内容ゆえに、教育的観点からも問題視され、若年層への影響が懸念された。しかし、これらの作品は一定の読者を持ち続け、都市文化に根差した文学として生き続けた。とりわけ、都市を主題とする作家たちには強い影響を与え、「繁昌記」的表現が創作に生かされた例も多い。

その代表が永井荷風である。荷風は独自の感受性を持ち、「繁昌記」の都市描写から多くを学んだ。荷風が東京の色々な町風景を描いた『腕くらべ』や『濹東綺譚』を執筆する際には『東京新繁昌記』等を参照し、都市の空間と人々の営みを描く手法に大きな影響を受けた。荷風の作品には、都市の風景のみならず、そこに生きる人々の内面や時代の空気までもが緻密に描き出されている。

「繁昌記」の伝統は明治後期から変容を遂げ、当初の風刺や独特の文体は次第に廃れていった。観光や都市開発といった社会的動向により、内容はより商業的・実用的なものへと変化し、文学的独立性は失われていった。しかしながら、「繁昌記」が残した都市表象の技法や視点は、その後の都市文学に受け継がれ、今日においても再評価の余地を残している。

「繁昌記」の研究は、都市空間から明治文学を読み解く鍵として重要である。本報告では、過去二十年にわたるヨーロッパ、特にドイツ・イギリス・イタリアの「繁昌記」研究を踏まえて、永井荷風と彼の都市的作品群を事例として取り上げ、都市文学における「繁昌記」再評価の試みを行う。

『源氏物語』における「もののあはれ」――外部からの再検討の試み

パリ・シテ大学教授　ダニエル・ストリューヴ
（司会）慶應義塾大学教授　津田　眞弓

「もののあはれ」について多くの研究が存在するが、その多数は本居宣長の「源氏物語」論の影響下にあって、この用語を『源氏物語』を解釈する鍵の美的概念として論じきた。本発表では、このような後世の解釈の系譜をいったん括弧に括り、平安時代中期におけるこの用語の本来的な意味に焦点を当てたい。『源氏物語』とそれ以前の文献における「もののあはれ」の用例を分析し、

その意味と用法について検討する。

まず『土佐日記』冒頭と『大和物語』四十一段等の早い例を検討し、これを踏まえて『源氏物語』の用例十七例のうち、有意なものを取りあげ、自然であれ、人事であれ、「もののあはれ」という言葉から連想されるイメージについて論じる。

「もののあはれ」を具体的な文脈の中で捉え、原文の精読から読み取れるものを整理したい。特に同じ文脈で共起する頻度が高い「をかし」や「面白し」との関連性についても論じる。

さらに、「もののあはれ」の口語訳や英語・フランス語訳について検討を加えたい。多くの場合は「もののあはれ」をメランコリー（melancholy）や哀しみと同一視する傾向が見られるが、この「もののあはれ」の解釈が『源氏物語』の受容にどのように影響するのかという問題を取り上げる。

これらの検討を通じて、『源氏物語』における「もののあはれ」の意義についてまとめたいと思う。

「日本の『文学』概念」再び ――ジャンルと文体様式を問い直す

国際日本文化研究センター名誉教授　鈴木　貞美
（司会）二松学舎大学専任講師　長谷川豊輝

前近代日本で「文学」は漢詩文の範囲を指してきたので、和歌や物語が「文学」と呼ばれたことは皆無だった。ところが、明治期に「文学」の概念（concept）が、近代欧語“literature”の意味に切り替わった。それも短いあいだに二つの概念が生じたため、「日本文学」に漢文を入れるかどうか、範囲を人文学とするか、抒情を本質とする「美文学」に絞るかが問われた。いまだに解決しているとは言い難い。

その問題を『日本の「文学」概念』（一九九八）にまとめたのち、わたしは二〇世紀西欧文芸思潮の受容が古典評価にはたらいたことに関心を向けた。興福寺の僧侶が法相宗の教義に基づいて編まれた説話集『今昔物語集』の研究書を芳賀矢一が一九一三年に刊行するに際し、『グリム童話』の国際的ブームに便乗して日本の民話集の代表のように喧伝したことや、一九二〇～三〇年代、意識の変化を内在的に随想形式で書く「心境小説」が流行し、それをヒントに池田亀鑑らが平安時代に自照的な「日記文学」という新ジャンルを発明したことを示しえた。「日記」「随筆」「説話」など中国渡来の語の意味が組み替えられてきた経緯の解明も、あたう限り当代に戻って個々の作品の発現の現場に迫る作業の一環をなす。

作品それぞれの文体（style）に緩やかにはたらく規範様式（writtenmodes）の整理も必要だろう。日本では古代から漢文（古典中国語）を公用語とし、その下で多様な漢文書き下し体と和文体が展開した。院政・鎌倉時代には公用語に変体漢文があふれ、反面、和漢の修辞をとりあわせる様式が開発された。国家が分裂した戦国時代、芸能に民間の口語体が流通し、お触書も日本語の箇条書きで出はじめた。

ところが、明治以来、第一線の学者が日本語を優先して文学史を考える癖をつけてしまった。西欧で長く知識人の国際共通語だったラテン語に換えて、自民族の一般民衆（people）の話し言葉をベースに標準語を整えた世俗語革命、その「国語」の思想が刷り込まれたためである。前近代の文芸文化を振り返るには、今日なお、その西欧近代の眼鏡を外すことが問われている。

休　憩　（15時40分〜16時）

共同討議（16時〜17時）

第二日　6月29日（日）

研究発表会（10時30分〜15時10分）　A・B2会場

受付　10時〜（Zoom開場　10時15分〜）

A会場　九段三号館　三〇二一教室

（10時30分〜11時55分）

日本語史における［状況ヲ］の確立メカニズム　名古屋大学大学院生　山下　大希

河東碧梧桐における「文」の変容――明治三十年代前半、俳文から写生文へ――　富山大学准教授　田部　知季

休憩　（11時55分〜13時）

（13時～15時10分）

「蛇」と「鳥」／スサノオ論――『言霊の天地・宇宙・神話・魂を語る』における鎌田東二と中上健次――　佼成高等学校非常勤講師　冨田陽一郎

近代国語国文学界における文学史研究の始発とその意義――私立言語取調所と東京学士会院――　山梨英和大学助教　天野　早紀

角川源義の『白山』掲載句の研究――中本恕堂との関係――　上智大学准教授　角田　佑一

B会場　九段三号館　三〇三一教室

（10時30分～11時55分）

アーノルド・ローベル「お手がみ」の生成過程を読む――国語・図画工作科の教科横断的な学習におけるスケッチの活用――　名古屋大学大学院生・名古屋市立東丘小学校教諭　勝倉　明以

「暗部屋の女御」考――『栄花物語』における藤原尊子の描写について――　二松学舎大学非常勤助手　大村　美紗

休憩　（11時55分～13時）

（13時～14時25分）

覚一本『平家物語』師長流罪譚における先行作品摂取の検討　二松学舎大学大学院生　嶋村　健児

竹河巻における月の在り方――正編から宇治十帖へ――　学習院大学大学院生　田島　文博

代表委員会（15時15分～15時30分）　**会場　九段三号館　三〇四一教室**

A会場　九段三号館　三〇二一教室（15時40分～16時40分）

学会三賞授与式

総会

大会運営委員長挨拶　二松学舎大学専任講師　長谷川豊輝

閉会の辞　大東文化大学教授　藏中しのぶ

第三日　6月30日（月）

文学実地踏査　各自・各グループでお回りください。

全国大学国語国文学会　第一三一回大会
研究発表会　発表要旨

【A会場】

日本語史における［状況ヲ］の確立メカニズム

名古屋大学大学院生　**山下　大希**

本発表では、日本語史における［状況ヲ］の確立の動因を探る。［状況ヲ］とは、「吹雪の中を遭難者を捜索した」の「吹雪の中を」のようなヲ格を指し、「ナカヲ」形式を取るとされる。この用法は現代語分析において、「道を歩く」のような［移動領域］の用法と関連すると指摘されている。本発表では、その関連性を通時的観点から支持する。

研究方法として、『日本語歴史コーパス（CHJ）』を用い、奈良時代から昭和時代までの「ナカヲ」形式を網羅的に調査した。その結果、［状況ヲ］と判定できる初例は一九〇〇年であり、一九四九年までに複数の例が確認された。したがって、［状況ヲ］の用法はこの時期に確立したと考えられる。

では、なぜこの時期に確立したのか。この問いを追究することで、［状況ヲ］と［移動領域］用法の関連性が明確になる。中古和文では、［移動領域］は主にニで示されたが、中世（室町期）には制御的な動詞（歩く、走る）において［移動領域］がヲで標示されるようになったとされる。他方、非制御的な動詞（漂う、彷徨う）の［移動領域］がヲで標示される例は、本発表の調査では一八五〇年頃に確認される。

この事実は次のように整理できる。制御的な動詞の［移動領域］は、もともとヲで標示されていた［移動経路］（例：前を通る）用法を基盤とし、動詞の意味がヲ格の出現を許す（制御性≒非能格性）ために生じたヲの領域の拡張である。一方、非制御的な動詞は、制御的な動詞の［移動領域］がヲで標示されることからの類推により、ヲ標示が拡張されたと考えられる。この段階で、「移動領域＝ヲ標示」という対応関係が成立した。

このような下地が整ったことで、一九〇〇年頃に［状況ヲ］の用法が確立したと考えられる。本発表は、［状況ヲ］が［移動領域］用法の拡張として成立したことを、通時的視点から示すものである。

河東碧梧桐における「文」の変容

――明治三十年代前半、俳文から写生文へ――

富山大学准教授　**田部　知季**

本発表では、明治三十年代前半における河東碧梧桐の散文に注目し、その文体上の変遷を、俳文からの脱却という観点から考察する。従来、『ホトトギス』で活躍した俳人らの文章実践は、「写生文」の確立として評価されており、考察対象は概ねその掲載作に限られてきた（福田清人、北住敏夫、相馬庸郎など）。しかし、同誌に寄稿した俳人たちは別の媒体でもしばしば散文を発表して

おり、『ホトトギス』の掲載作もその活動の一環と位置づけられる。他方、碧梧桐は子規ら日本派の主要俳人でありながら、先行研究に乏しく、文章家としての一面については検討の余地が多く残されている。

発表ではまず、明治二十八年頃の碧梧桐が新聞『日本』に寄稿していた紀行文を取り上げる。それらの諸作は文語体を基調としており、多くの場合文中や文末に俳句を配している。本発表ではそうした傾向を、近世以来の俳文脈と関連づけながら再評価する。具体的には、許六編『風俗文選』や也有『鶉衣』のほか、同時代の四方太『俳文評釈』（明三三・二、新声社）や鼠骨『俳文作法指南』（明三六・七、大学館）との関わりを検証する。

次に、そうした初期の紀行文と、明治三十二年前後の文章を比較検討する。この時期、子規らの文章会「山会」が始まり、碧梧桐も『ホトトギス』に言文一致体の散文を寄せている。そこでは必ずしも句は挿入されておらず、専ら東京を舞台とした身辺雑記的な傾向が認められる。本発表ではそれらの諸作と共に、「秋の日脚」（明三一・一二『芙蓉』）や「雪の日」（明三三・二『雪吹』）、「野分」（明三三・一二『俳星』）など、既存の単行本や全集に未掲載の文章にも触れながら、『ホトトギス』から派生した散文実践の広がりを確認する。また、小説として発表された「闇路」（明三〇・一～六『大日本』）や「歌」（明三一・三・一五『少年倶楽部』）なども視野に入れることで、その書き分けの傾向を明らかにしたい。

「蛇」と「鳥」／スサノオ論

――『言霊の天地・宇宙・神話・魂を語る』における鎌田東二と中上健次――

佼成高等学校非常勤講師　冨田陽一郎

鎌田東二と中上健次は対談集のテクスト『言霊の天地・宇宙・神話・魂を語る』で、国家や普遍文明・宗教が来る前の神々が「蛇」とされ、国家や普遍文明・宗教が「鳥」とされて、この国家や普遍文明・宗教が勝利し、土俗的な宗教・呪術などが敗北するという傾向、つまり「鳥」が「蛇」に勝利するという傾向が世界的にみられるという対話をしている。

これは聖書の創世記でのアダムとイブを惑わした蛇と唯一神の関係も、いわば「鳥」（天から来るもの）と「蛇」（地を這うもの）の対立関係であろうし、新約聖書の天使と悪魔の闘いでの天使たちの勝利も「鳥」たちの「蛇」たちへの勝利ともいえよう。これは熊野本宮大社における八咫烏と国家との関係も同じであろう。伊勢神宮における天孫族も天の神の末裔たちであり、出雲・熊野などの国つ神や土蜘蛛らを平定して支配し国家を成立させたことも、古事記・日本書紀を見れば、理解されるといえる。

だが興味深いことには、ヘーゲルの奴隷と主人の関係性の逆転のごとく、支配される側の「蛇」が支配する側の「鳥」を逆に支配したり、相互的に支配・被支配の関係になる事で、中沢新一の「対称性」や柄谷行人の「交換様式D」が成立し、ヒエラルキーを打破し平等性や対等性が発生する事である。

発表では鎌田東二と中上健次の対談の内容から文学と文化人類学・民俗学との関係、特に古事記・日本書紀において天つ神の代表であるアマテラスと、国つ神の代表であるスサノオ・オオクニヌシの役割を考察し、特に、荒ぶる神であり折口信夫のいう「まれびと」、赤坂憲雄のいう「異人」でもあるスサノオの独自の立場について考えてみたい。

なお鎌田東二は國學院大學とも縁が深く、神道にも造型が深い。対談の頃の中上健次は病に倒れる直前であり、いわば最後の中上健次の見解とも言える。この最後の中上健次と、当時まだ新進気鋭の鎌田東二の対談より、多くの示唆を受けてみたいと考えている。

近代国語国文学界における文学史研究の始発とその意義

――私立言語取調所と東京学士会院――

山梨英和大学助教　**天野　早紀**

本発表では、近代国文学の文学史研究の成立を、国語学史の上から再検討することを目標とする。

三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』（一八九〇）は、近代国文学とその主流となった文学史研究の嚆矢とされる。一方で同書補助として名を連ねる落合直文は、私立言語取調所（一八八八―九〇）において担当した調査事業「日本文学史上古編中古編」の原稿を彼らに提供していた可能性がある。同所の趣旨は西洋と立ち並んでいくための日本語の調査整備、特に言文一致普通文体をめざした関連事業、またひいては日本（語）理解による愛国心の養成にあった。ここでは「日本文学史」とは言文二途の経緯を明らかにするものであったと考えられる。

これら二つの日本文学史の出会いを、一私立機関の一調査員による恣意的な目論見の結果として片づけることはできない。東条操（一九三三）「明治大正の国語学（八）」によれば、私立言語取調所の背景には文部省所管の東京学士会院における建議があった。同院では一八七九年から八〇年にかけて日本文典編纂の建議、また付随事業として博言学（印欧語の歴史比較言語学）導入の建議及び新たな学術機関設立の建議があった。その中で西周は日本文学会社を設立し日本語学を組織面・内容面ともに体系化し、博言学は文典編纂事業の後、且つ日本語文内部の沿革を明らかにするために用いるべきものと位置づけた。西自身その「沿革」を「文章史ヒストリー、オフ、リテラチュール」とも言い表した。

総じて、文学史研究は、早く一八七〇年代末に言語学を参照の上で日本語学の学問体系の一部分として構想され、それが後に一八八〇年代末に至って言語取調所の調査事業を介して国文学に合流し、『日本文学史』の成果に結びついたものと考えられる。近代における文学史研究とは、国語学と国文学とが「文」という対象を共有しつつ学史上協働して創出したものであったといえる。

角川源義の『白山』掲載句の研究

――中本恕堂との関係――

上智大学准教授　角田　佑一

本発表の主題は角川源義（一九一七―一九七五）の初期俳句の中で俳誌『白山』に掲載された俳句の特徴を明らかにし、これらの句が角川の生涯の俳句の中で、どのような意義を持っていたのかを解明することである。

角川は中学生の頃、桂井未翁・中本恕堂主宰の俳誌『白山』と大須賀乙字の弟子である伊東月草主宰の俳誌『草上』に投句していた。後年、角川は『草上』や『草上』同人との関わりについてのみ語るようになり、『草上』掲載句のみを自らの句集に残した。そして、自分が乙字の俳句の伝統（松尾芭蕉の俳句への回帰、二句一章、季語の季感重視など）の正しい継承者であることを主張した。これに対して、角川は『白山』や『白山』の有力俳人との関わりについては一切語らず、『白山』掲載句を自らの句集に決して残さなかった。

以上の点を踏まえた上で、本発表では第一に角川源義の『白山』掲載句の特徴を明らかにする。その際、同時期に『草上』に掲載された彼の句と比較する。第二に『白山』の有力俳人であった中本恕堂の俳句の特徴（「生の自覚」、「心の培ひ」、生きとし生けるものの「生の欲求」を表現するものとしての俳句）を明らかにする。第三に角川の『白山』掲載句の特徴と中本の俳句の特徴とを比較しながら、角川が中本から何を受け取り、何を受け取らなかったのかを考察する。第四に角川の『白山』掲載句が角川の生涯の俳句において、どのような意義を持っていたのかを明らかにする。その中で、なぜ角川が後年『白山』や中本恕堂との関係について一切語らなくなり、『白山』掲載句を自らの句集に残そうとしなかったのか、さらに『白山』との関わりを断ったことにより、角川の俳句の中にいかなる要素が失われたのかについて考察してみたい。

【B会場】

アーノルド・ローベル「お手がみ」の生成過程を読む

――国語・図画工作科の教科横断的な学習におけるスケッチの活用――

名古屋大学大学院生・名古屋市立東丘小学校教諭　勝倉　明以

本発表は、小学校低学年の教材であるアーノルド・ローベル「お手がみ」を取り上げ、生成過程に焦点を当てることでその性質を明らかにし、文学的な文章を読む活動における教科横断的な学習の意義を検討するものである。

当該教材は一九八〇年を皮切りに、現在は全社の国語科教科書に採録されており、全二〇作品で構成されるシリーズの初期作品であり、他作品との関連性が見られる。本教材は五作品目に該当し、三作品目の「なくした　ボタン」との連続性が確認できる。なぜなら、この二つの作品のみ、登場人物達が着用している上着

が重複するからだ。とはいえ、初期の「お手がみ」では、「友情」の象徴である上着をかえるくんが着用しておらず、両者に連続性は存在しなかったことは見逃せない。

本作は絵本という性質上、挿絵を読み解くことの重要性は言うまでもない。先行研究では、冒頭と結末の手紙を待つ場面で同じ構図の挿絵が存在しているため、対比的に捉えられ、二人で手紙を待つ物語として読まれて来た。しかし、生成過程に焦点を当てると、手紙はがまくんが一人で受け取っており、この前提が崩れる。そのため、複数存在しているスケッチと「決定稿」における異同に注目し、「待つ」ことの意味を問い直して読むことが妥当だと考えられる。

現行の学習指導要領では、カリキュラム・マネジメントの実現のために教科横断的な学習の導入が求められている。そのため、スケッチを教材として図画工作科の鑑賞教育の俎上に載せ、カリキュラムデザインを行った。視覚的な支援が可能な資料を用いて物語を読解する国語教育実践を行った結果、「決定稿」とスケッチにおける異同は、がまくんの性質に拠る部分が少なくないと結論付けられた。本研究は、草稿研究の視座を初等教育に導入した学際研究である。一次資料を活用して物語の生成過程を読み解く実践によって、スケッチの教材としての有効性を見出すことが出来る。

「暗部屋の女御」考

――『栄花物語』における藤原尊子の描写について――

二松学舎大学非常勤助手　**大村　美紗**

一条天皇の女御である藤原尊子は、粟田関白藤原道兼と、その叔母にあたる従三位典侍藤原繁子の間に生まれた一女である。『一代要記』によると、長徳四年（九九八）二月、御匣殿別当として「入内」した。後宮には、藤原道隆女の定子、藤原公季女の義子、藤原顕光女の元子がおり、入内には幼い女しか持たない藤原道長が静かにその成長を待っていた時期のことである。長保二年（一〇〇〇）八月に女御宣下を受けており、歴史史料や歴史物語においては、「前御匣殿女御」・「暗戸屋女御」・「暗部屋の女御」などと呼称されている。

『栄花物語』巻第三「さまざまのよろこび」には、父道兼の定子入内に対する羨望の思いと共に、未だ誕生を見ない女の入内に向けて準備を進めていたことが記されており、こうした記述からは道兼が女の入内を熱望していたことが窺える。それにもかかわらず、同巻には道兼が尊子に関心を示さなかったと記されており、巻第四「みはてぬゆめ」では、尊子の着裳や入内を主導したのは母の繁子で、入内に協力・差配したのも、繁子に通っていた平惟仲や、時の左大臣道長であったとされている。

『栄花物語』のこうした矛盾に満ちた描写は、どのような意図に基づいているのであろうか。それを考えるのに、『栄花物語』において、尊子が「暗部屋の女御」と呼称されていることは注目

に値する。本発表では、従来、所在不明とされてきた「暗部屋」が後涼殿東廂にある、通常では女御の居所とされることのない部屋であることを明らかにした上で、その名を冠した呼称が尊子を貶める蔑称であるという理解を示す。さらに、繁子の尊子に対する強い影響力が記述されるのも、父の庇護を欠く女御として描出するためであり、こうした表現によって『栄花物語』が尊子を女御の身位にそぐわない人物として造型しているという読みの可能性を示したい。

覚一本『平家物語』師長流罪譚における先行作品摂取の検討

二松学舎大学大学院生　嶋村　健児

覚一本『平家物語』では巻第三に見える、妙音院藤原師長が、所謂治承のクーデターで父の藤原頼長の縁坐により、罪なく尾張国へ流謫される場面を考察する（以降「師長流罪譚」と称す）。

藤原師長は、琵琶をはじめとする管絃から催馬楽、朗詠、声明等に至るまで、多くの音楽を相承し、日本音楽史の側からも重要な人物と位置づけられる。殊に琵琶は、琵琶法師の集団である当道座の資料『当道要集』にも「別条」である人物として師長の名が列挙され、特に語り本との関係で注目される。

師長流罪譚の場面は、諸本で異同があるが、師長が尾張国に流され等閑に日々を送る描写と、熱田明神に参詣の折、彼が神前で琵琶や朗詠をする箇所は概ね一致して描かれており、まずはそれらの場面を分析する。本文は、語り本系の覚一本を中心に検討する（対校本として読み本系から延慶本、長門本、源平盛衰記を用いる）。

具体的には、師長流罪譚の修辞表現に焦点を当てる。師長流罪譚では、先行研究により読み本系では、白居易『白氏文集』の「琵琶引」など中国の故事、さらに、語り本では記されない道行文での『東関紀行』への依拠が夙に指摘されている。

だが、それらの直接的な引用に留まらず、語り本全体を含めた師長流罪譚における「琵琶引」の詩句の影響については、管見の限り言及が少ないと思われる。そこで覚一本を中心とした『平家物語』の表現を列挙し、「琵琶引」からの連想が働いているか考察してみたい。

加えて、師長流罪譚で『源氏物語』須磨・明石巻からの連想も働いている可能性を指摘する。須磨、明石へ居を移す光源氏の境遇は師長と重なる。また、『源氏物語』須磨・明石巻では『平家物語』の師長流罪譚と重なる漢籍の摂取が、多くの源氏物語研究の側から指摘されている。

以上のことを踏まえ、師長流罪譚がこれまで指摘された先行作品に加え、『源氏物語』須磨、明石巻の内容も摂取していることについて論じていく。

竹河巻における月の在り方

――正編から宇治十帖へ――

学習院大学大学院生　田島　文博

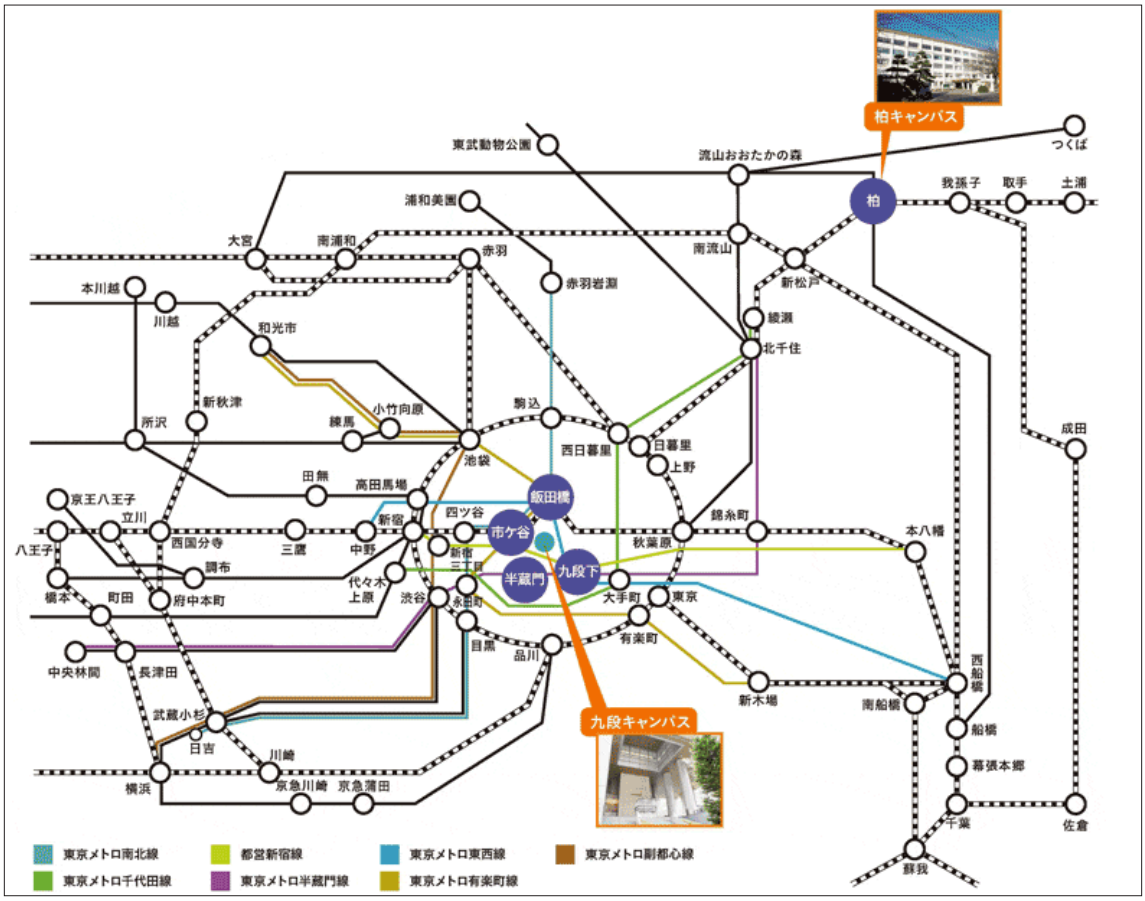
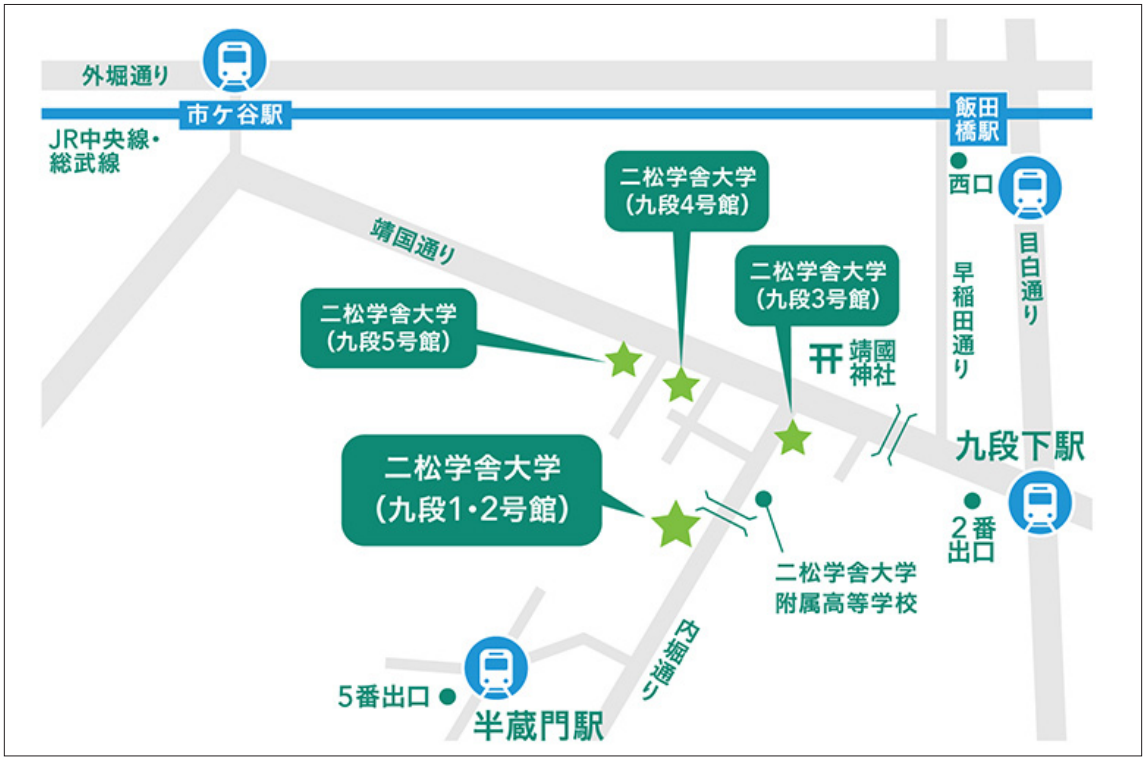
物語文学において月は、物語の展開と緊密な関係をもつ舞台装置である。池田亀鑑［１９７７］は、月は「もののあはれ」の精神を象徴しており、その研究は物語の本質的な研究へ繋がると指摘した。以降も月と物語の研究は、作品ごとに用例を掘り下げるものや、月の精神史ともいえるような横断的な研究など、多方面に展開されてきた。

『源氏物語』の月の用例は五四帖全体にみられるが、それらは光源氏の人生と密接に結びつき、物語全体を支える光源ともいえるほど重要な役割を担っていた。しかし一方で、宇治十帖における月の用例は、正編世界におけるそれらと異なる様相を持っている。本発表では、それらを繋ぐ匂宮三帖のうち竹河巻の月の用例から、その差異について確認していきたい。

竹河巻では蔵人少将の恋の不如意が語られるが、その象徴的な場面が月下の男踏歌である。昼よりもまばゆい月光のもと、大君の気配を感じた蔵人少将はよろめき、地に足もつかず、その姿を女房達に揶揄されてしまう。いわば、月は彼の恋の不能をさらけ出したのである。恋の不能と月、この傾向は宇治十帖においても同様である。

宇治の姉妹を有明の月のもとで垣間見た薫（橋姫巻）は、雪がしきりに降る夜、あたり一面を照らす月の光のなか亡き大君を追慕する（総角巻）。そして、形代である浮舟と出会い、夕月夜のもとで往事の恋を忍びながら三条邸に迎えることを話すがそれが果たされることはない。それどころか、その月の下旬に、有明の月のもとで匂宮と浮舟は夢のような逢瀬を遂げ、浮舟は入水の決意を固めていくのである（浮舟巻）。やがて、薫は生還した浮舟のもとを訪れるが対面は叶わず、物語は終焉を迎える。月の美しい八月のことであった（手習巻）。以上のように、正編世界で光源氏の人生を彩っていた月は、匂宮三帖・宇治十帖に至り恋の不能をさらけ出すものへと変貌していくのである。

○二松学舎大学九段キャンパスアクセス路線図



○九段キャンパス周辺地図